

#02 オフセット印刷とリトグラフの表現の幅の探求、 印刷効果の獲得

計画・目標

お互いの専門分野について意見を交わすうちに、「デザインにおける印刷」と、「アートにおける印刷」とでは得られる知識、体験、感覚が大きく異なることがわかった。そこから、原理的には同じであるはずの、オフセット印刷機による印刷物とリトグラフ作品と呼ばれる印刷物とで、仕上がったものから受ける印象が異なるのは何故かという疑問が生じた。

どこからオフセットと呼ばれ、何がリトグラフと呼ばれているのか。その差は「機械で刷ること」と「手で刷ること」の違いによって生まれるのか。

ひとつのイメージを両技法を往復して刷り重ねることで、その違いを体験をもって獲得する。

工程

- 1、野菜スタンプでイメージを作成（※1）
- 2、スタンプをデータ処理、イメージの調整、どのような版を用いてどう印刷するか計画（※2）
- 3、印刷

以下の版・印刷方法を用い、準備できたものから随時着手。

【1 版目】

製版：現像液でPS版に直接描画する（修美社）
印刷方法：オフセット印刷機（修美社）

【2 版目】

製版：原稿を入稿し、それを製版機で製版（修美社）
印刷方法：リトプレス（京都リトグラフ工房）

【3 版目】

製版：石版もしくはアルミ版に溶き墨などで制作した手作り版（京都リトグラフ工房）
印刷方法：校正機（京都リトグラフ工房）

（※1）イメージ制作には、印刷で起こる現象に集中するため、描き手の癖といったバイアスのかかりにくいモチーフ・手法として「野菜スタンプ」を用いる。また、印刷をより複雑にさせる目的でデジタル製版の版と手作りの版を用いるが、その両方で同じ温度の画像を得やすい手法という狙いもある。

（※2）検証方法として、A～Cの三段階があると考えているが、今回はBに挑戦する。

A：1つの版で3種の印刷方法を試す（検証）

B：それぞれの印刷方法にイレギュラーな版を合わせる（効果を最大限引き出すために、インクは各印刷方法で通常使用されるものを使う）（展開）

C：Bで作成した版を、本来組み合わせられる印刷方法で刷る（発展）

成果

- ①リトグラフ、オフセットという言葉への正しい理解
- ②製版方法の違いから生まれる、画像の表現の違いを検証
- ③各々の印刷技法による印刷の再現性

①リトグラフ、オフセットという言葉への正しい理解

まず最初に、私たちの理解不足により「オフセット＝デジタル＝機械印刷」「リトグラフ＝アナログ＝プレス機印刷」というイメージから活動は開始されていた。

例えるなら、「スパゲティ」は本来「パスタ」の円の中にあるはずなのに、それぞれの言葉が独立して対等している様に感じられ、混乱する場面があるのと似ている状態だった。石を磨くという原始的な作業をしても、オフセット印刷機がすごいスピードで大量に紙を吐き出しているのを見ても、その言葉の使い分けにピンときていなかった。しかし、校正機印刷を初めて試みた時、一人では到底持ち上げられないような大きな石版から、イメージのみがゴムローラーに押し取られ、石とフラットなレベルにある紙の上へ転写される一連を体験した時。版も紙も動かない、イメージだけが移動する印刷。「オフセット＝紙を版の上にセットしない」と言う意味が雷に打たれた様に理解でき、体験を伴う理解はこれほどにもクリアなものかと思った。

- ②製版方法の違いから生まれる、画像の表現の違いを検証
- ③各々の印刷技法による印刷の再現性

このプロジェクトでは、有限会社 修美社さんにご協力いただき、1版目と2版目では、本来組み合わせられる製版方法と印刷方法をそれぞれ入れ替えて実施しており（工程参照）、普段の方法では得られない画像の表現を得られたり、プレス機や網点分解による画像の再現性の高さを実証できた。

1版目では、画像が網点分解されていないことで発生した奥行きのある表情が印象的だった。スタンプという技法のため、透明度のある中間調を意図的に生み出すことは難しかったが、偶発的に生まれたその部分は他の技法では得られない、湿度のある質感だった。

2版目では、手刷りにも関わらず、作成した最大線数110線での分解部分でも網点を視認できた。インクの顔料の差や、印刷時の気温、また技術的な面にも結果が左右されはしたものの、概ね網点らしさを感じられる印刷となった。細部を安定して表現できる網点の利便性も改めて体感した。また、画像によって相性の良い線数があると感じられ、線数が低く画像として荒い仕上がりとなるものでも、刷った際のクオリティは、粒子的にはより細かいはずのリトグラフと遜色ない印象だった。「線数が高い≒解像度が高い≒粒子の密度が高い」といったことが、作品のクオリティを高くするわけではないということもわかった。

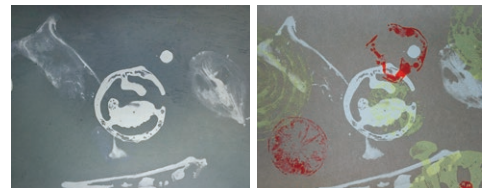
そして3版目では、石版での製版・印刷を経てのアルミ版制作により、製版原理を深く理解する共に、リトグラフならではの感覚のない手感覚の難しさ、それが印刷物に直接影響を及ぼすこと、そして印刷された物の物質感の楽しさを十分に堪能することが出来た。アルミ版では、3度の石版での失敗を経たため、安定して印刷できることを優先し強い描画を実践したが、初期に体験として石版印刷に挑戦した際の解き墨の質感もまた印象的で、水分と粒子の混ざった透明感は、1、2版目のどちらでも得られないであろう繊細なものであった。



紙を版の上にセットするリトプレス



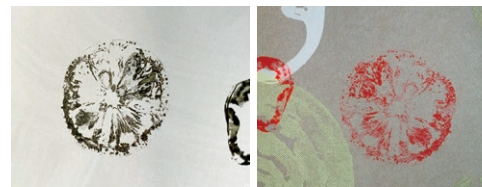
紙を版の上にセットしない校正機、オフセット印刷機



1版目（手作りPS版）の版と刷り上がり（オフセット印刷機）



2版目（製版機による製版）の版と刷り上がり（リトプレス）



3版目（アルミ版に描画剤）の版と刷り上がり（校正機を予定も最終的にはリトプレス）

完成品



special thanks to...

出原可先生（京都リトグラフ工房）
山下昌毅さん（有限会社 修美社）
衣川泰典さん（美術家／石版画家）

RIVER RETTER（リバーレター）はグラフィックデザイナー河村真由美と版画家河股由希によるユニット。写真・版画・商業印刷ほか、多様な印刷方法を行き来することから発生する新しい効果を研究しています。

✉ riverretter@gmail.com @riverretter